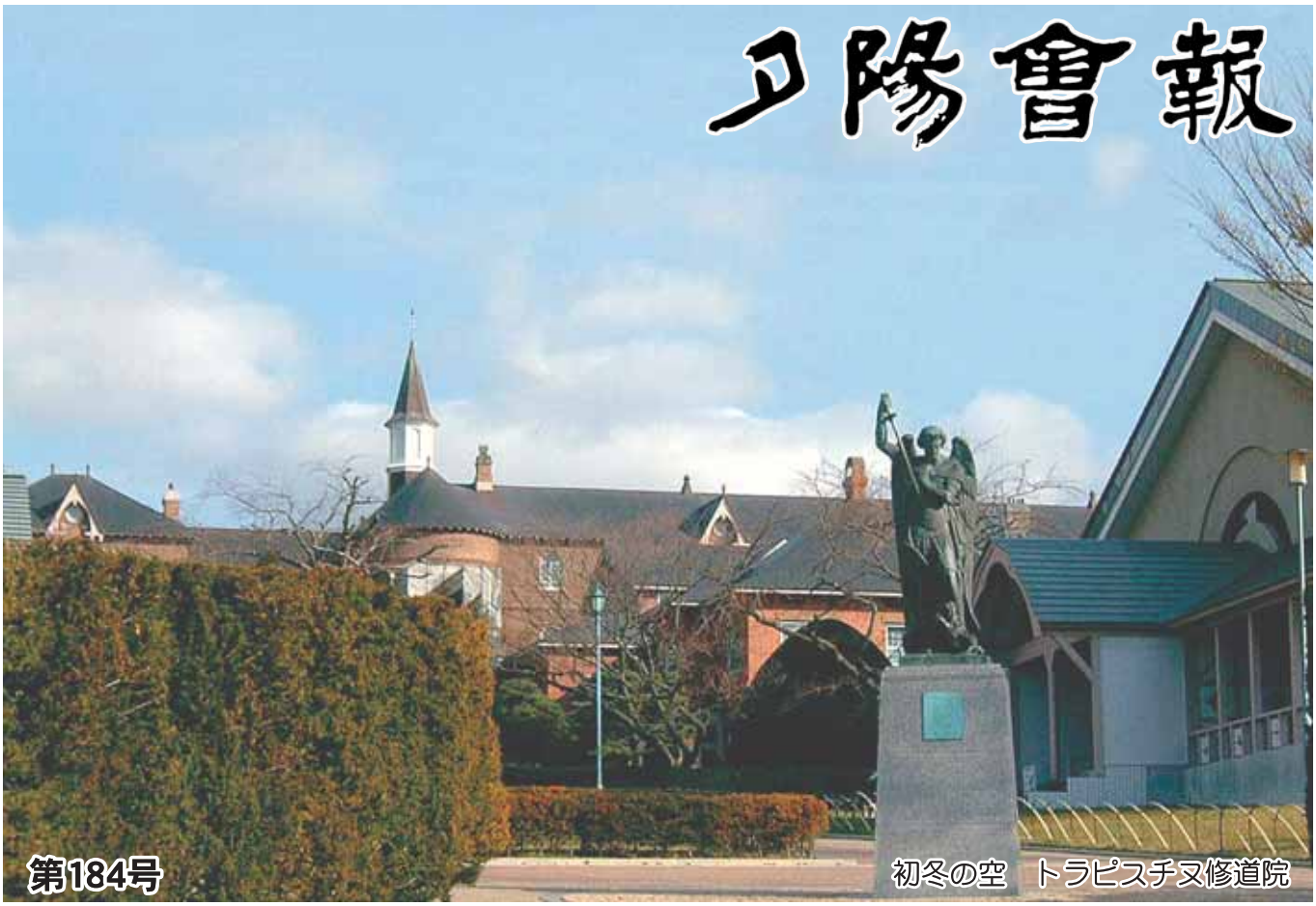


初冬の空　トラピスチヌ修道院

◇巻頭言◇

母校の新たな歩みに期待する

会長　川島孝夫

明治九年二月「函館小学校教科伝習所」を源流として、大正三年、初代校長和田喜八郎氏を迎え、北海道における近代的教員養成機関として発祥し歴史と伝統を誇った母校が、北海道教育大学再編構想計画の中でその流れを大きく変え新しい道を歩もうとしている。

北海道函館師範学校～北海道第二師範学校～北海道学芸大学函館分校～北海道教育大学函館分校～北海道教育大学函館校と五度に亘り校名を変えつつも大正七年、第一回の卒業生を送り出し、以来、今日まで道内外に二万名に及ぶ卒業生を送り出した母校が、教員免許取得が可能の道が残されたとは言うものの、教員養成単科大学としての使命に幕を下ろし複合大学の一課程（学部）となることに対しての寂しさを感じざるを得ない。

然し、少子化の影響を受け教員就職率の低下を来たし、国立の教員養成大学の課程の一部を新課程（ゼロ免課程）に改組し対処して来たが、その後も教員養成学部卒業者の教員就職率の減少が続き、平成十年度から十二年度までの三年間に教員養成課程全体の入学定員が約五〇〇〇人削減され現在、約一万人となってしまった。

また、「知の時代」とも言われる二十一世紀に入り、国立大学は人材大国・科学技術創造立国を目指し、国際競争力のある大学になるため構造改革が進められることとなり、競争原理をとり入れた独立法人組織とし運営されることになった。

このような時代の流れに対応するため母校は学内での四年間に亘る議論を通し練り上げた「再編基本計画」を公表した。（この四年間の経緯については、すでに前安島会長が会報一七七・一八〇・一八一）の各号で詳しく述べられている。

再編の基本方針では「教員養成課程と新課程（ゼロ免課程）の発展を期し、教員養成課程と新課程の併存を改め、小規模分散を避け効果的に集約・再編する」「十八年度のスタートを目指す」となっている。

この結果、岩見沢校と函館校は教員養成課程を持たない教養課程のキャンパスとして新たな出発をすることになった。

北海道における教員養成の歴史的伝統を持つ函館校が、何故、いかなる理由をもってこのような位置づけになったのか、学内で四年間に及ぶ議論の結果と言われても同窓の一員としては理解に苦しむ所である。然し、教員養成単科大学を取巻く現状は前述のように極めて厳しい状況に置かれていることもよく理解できる。

「変化の無い所、発展なし」と言われるように九十年の歴史を土台に新しく生まれ変わる母校の発展に限りない声援を送りたい。「人間発達専攻」コースの六十名は開放型での小学校教員免許取得が可能であり、伝統の灯は絶えることが無い。「土地墾闢・人民蕃殖」の理念のもと、新キャンパスの新課程で豊かな現代的教養と専門的学芸を身につけ地域や社会で広く活躍する同窓の誕生に期待したい。

会務報告

幹事長
藤川　隆
（昭和48年卒）

《一般会務》

7・8　北海道教育大学長と五校同窓会長との懇談会に川島会長が出席（札幌）
14　夕陽指導主事等会総会に川島会長が出席（札幌）
17　夕陽会本部顧問　川村清一氏の葬儀に藤川幹事長が参列（浦河）
20　夕陽会報第183号発行
8・1　明日の教育を考える研修会を開催（函館）
17　平成16年度第一回本部役員会を開催（函館）
21　道内支部幹事長会議を開催（札幌）
9・4　本部事務局専門部長・部員会議〈委嘱状交付〉を開催（函館）
10　大学本部との協議会に川島会長が出席（函館）
24　北海道教育大学五校同窓会長等会議に川島会長・藤川幹事長が出席（上富良野）
10・9　夕陽会中央会議を開催（札幌）
16　本州支部幹事長会議を開催（五所川原）
20　第八回夕陽音楽会実行委員会に川島会長・藤川幹事長が出席（函館）
11・4　秋の叙勲受賞者に祝詞送付
15　北海道教育功績者表彰受賞者に祝詞送付

《支部総会・祝賀会・個展等》

7・2　渡島支部長万部支会総会に川島会長が出席（長万部）
渡島支部松前支会総会に類家副幹事長が出席（松前）
3　昭和31年卒同期会に川島会長が出席（函館）
6　渡島支部鹿部支会総会に川島会長が出席（鹿部）
9　渡島支部戸井・恵山・椴法華支会合同懇親会に川島会長が出席（函館）
14　渡島支部南茅部支会総会に須藤副幹事長が出席（南茅部）
15　渡島支部木古内支会総会に川島会長が出席（木古内）
19　昭和38年卒同期会「淑女の会」に祝意（函館）
24　渡島支部支会長・幹事長会議に川島会長が出席（函館）
30　昭和30年卒同期会に祝意（定山渓）
31　岩手支部・函館総会に川島会長・藤川幹事長が出席（函館）
8・6　昭和42年卒同期会に川島会長が出席（函館）
8　昭和39年卒同期会に川島会長が出席（函館）
21　鶴陵会渡島支部懇親会に塩崎副会長が出席（函館）
27　昭和33年卒同期会・幹事会に川島会長が出席（函館）
9・28　昭和20年卒同期会に川島会長が出席（函館）
29　昭和29年卒同期会に川島会長が出席（洞爺湖）
30　昭和25年卒同期会に祝意（札幌）
10・1　昭和36年卒同期会に川島会長が出席（函館）
5　昭和24年卒同期会に祝意（函館）
9　「故川村清一氏を偲ぶ会」に川島会長・中瀬副会長・藤川幹事長等が出席（札幌）
16　昭和40年卒同期会に祝意（函館）
23　道央ブロック会議に川島会長・中瀬副会長・藤川幹事長が出席（岩見沢）
30　道北ブロック会議に藤川幹事長が出席（留萌）
道東ブロック会議に川島会長が出席（別海）
11・13　北師教育文化振興会函館渡島支部懇親会に藤川幹事長が出席（函館）
昭和37年Ⅱ卒同期会に祝意（函館）
20　特別別科同窓会に祝意（函館）
北海道教育大学附属函館小学校開校80周年記念式典に川島会長が出席（函館）

全国支部幹事長会議

～「創造し、行動する夕陽会」のさらなる発展のために～

今年度の道内支部幹事長会議は、八月二十一日（土）、午後二時三十分より札幌市にあるホテル札幌サンプラザを会場に、本部役員十八名、二十二支部の幹事長の出席の下、開催された。会議のはじめに出席者全員で夕陽賛歌を高らかに斉唱し、川島新会長の挨拶で始まった。

冒頭の会長挨拶では、就任に当たっての抱負を述べるとともに、地元函館以外の地での開催の意義と本会議開催の目的を確認した。

議事に入っては、尾畠悌介、中瀬裕義両議長の進行により、議事の一番目の報告事項として、会長より新しい学部構想に基づいた北海道教育大学改革と函館校の現状及び将来について説明があった。次に藤川幹事長から本部総会を受け、市町村合併に伴う今後の本部、支部組織の在り方の見直し、会員層の拡充について調査研究するためのワーキンググループの立ち上げ、ホームページのリニューアル、会費納入率の向上、期限付き採用教員の研修会の開催など、平成十六年度の運営方針に基づいた推進事項についての報告がなされた。

協議事項では、支部運営や活動の活性化を図るための工夫した取組について、各支部間の情報交流があった。各支部からは、活動の工夫として全会員対象の研修を基盤とした組織づくりの強化や期限付き採用教員の研修会の企画を通した若手会員の開発、支部長・幹事長の会員訪問、若手会員や女性会員への役割分担による同窓意識の高揚、若手会員の人事のための支援など、各支部の実態に応じた様々な工夫が紹介された。また、課題として町村合併に伴う組織運営の在り方や教職員以外の会員の組織化、会費納入率の向上のための方策などについて論議された。本部としても研究補助や期限付き採用教員の研修会の資料提供など各支部の取組に積極的に支援することが確認された。

続いて、各部から取組状況の報告や連絡が行われた。庶務部からは、次年度の本部総会が平成十七年六月

十七日（土）に函館市で開催されること、財政部からは、会費収入の減少化の説明の後、一層の納入努力をいただきたい旨の依頼があった。組織部長からは、平成十六年度版の会員名簿の完成と作成に当たっての各支部の協力への謝辞があった。文化部長からは、来年一月十六日（日）に開催される第八回夕陽音楽会の案内、厚生部長からは、夕陽記念館の整備状況と会員作品等の収蔵品、資料等の寄贈が呼びかけられた。

最後に、川島会長より、出席の御礼と厳しい時代における今後の夕陽会の発展のため組織一丸となって取り組むことを願う言葉をもって閉会した。

（昭和54年卒　土谷　敬記）

受賞（章）おめでとうございます

春の叙勲

〈瑞宝双光章〉

平埜昭太郎　氏　昭和22年Ⅱ卒
小樽市梅ヶ枝町一一の五

毛内　善三　氏　昭和22年Ⅱ卒
浦河町東町ちのみ四の一一の二

竹内　勲　氏　昭和43年卒
伊達市元町七八の一

秋の叙勲

〈瑞宝双光章〉

磯部　正博　氏　昭和32年Ⅰ卒
上磯町常磐一の二〇の一

細井　道三　氏　昭和22年Ⅱ卒
恵庭市恵み野西二丁目七の一九

舩矢　美幸　氏　昭和29年Ⅱ卒
函館市湯川町二丁目五の一〇

十六年度道教育功績者表彰

〈教育功績者表彰〉

石戸　大機　氏　昭和42年卒
函館市深堀町二八の一

笹原　克哉　氏　昭和42年卒
上ノ国町大留七〇

本州支部幹事長会議

今年度の本州支部幹事長会議が、十月十六日（土）、立佞武多の里、五所川原市にて開催された。青森津軽、青森西北五、青森南部、秋田、岩手の五支部から支部長、幹事長が参加し活動報告や協議がなされた。

川島会長の開会挨拶に引き続き、中谷副会長によって議事が進められた。平成十六年度本部総会の報告が藤川幹事長よりなされ、今年度の推進事項として大学の地域連携・社会貢献への積極的な支援および教職外会員の組織強化、女性・若手会員の運営への積極的な参画についてまた、母校支援として学生のスポーツ・芸術活動への支援などの説明がなされた。

次に川島会長より母校関係についての説明がされた。5キャンパスの維持を前提として教育組織を改編し、新しい教養系学部として函館校の学生数が増加することや新課程（ゼロ免課程）の卒業生が千人を超している状況から教職外に就く学生に函館校の同窓である意識を持たせたいことが話された。さらに法人化に伴い、運営体制の改変や大学の中期目標・計画に基づく運営や第三者評価機関による業績の評価がされること。また学校裁量での予算執行等、従来の考え方を変えなければならないことが報告された。

続いて、本州各支部より今年度の各支部の取り組みや活動状況が報告された。各支部から会員の組織強化についての方策や課題が述べられた。その中で津軽、西北五支部ではゼロ免課程の会員や若手会員が増えてきつつあるという心強い報告もあった。青森三支部の連携強化という点では、根本的な組織改編や会員掘り起こしの最重要性が話された。秋田支部からは支部名簿の整備、岩手支部からは函館で行われた、支部二十周年記念集会の様子も報告された。

会議終了後の懇親会では、昭和十九年卒業の青森西北五支部の秋田幸誠前支部長の遺骨収集に行かれた貴重な体験を交えながらの祝杯に始まり、先輩諸氏の学生時代の思い出や新任時代のエピソードに盛り上がった。今回、最若手でありゼロ免課程卒業生の参加もうれしい限りであり、新風が吹き込む兆しを感じた。青森南部永井支部長の乾杯で和やかな会を閉じた。

（昭和52年卒　原子はるみ記）

夕陽記念館展示目録の紹介

～夕陽記念館展示目録（補遺ＸＶ）～

厚生部長　安　保　勝　順
（昭和44年卒　函館市立北星小学校）

平成16年11月１日現在

《同窓会活動の姿》

番号	種　別	書　名　名　称	著作・制作者	数量	寄　贈　者	備　考
1	作　品	夕陽会賛歌作品	西村賢三郎(舟水)(Ｓ４年卒)	1	佐藤　任(Ｓ16年卒)	軸装
2	作　品	臨書作品「晋詞之銘」	白崎　久彦(Ｓ10年卒)	1	白崎　久彦(Ｓ10年卒)	半切
3	書　籍	「それでも学校はある」	竹野　栄(Ｓ18年卒)	1	竹野　栄(Ｓ18年卒)	
4	書　籍	「英語の発音～基礎編」	大坂　四郎(Ｓ33年卒)	1	大坂　四郎(Ｓ33年卒)	
5	書　籍	「カレッジ英文法」	大坂　四郎(Ｓ33年卒)	1	大坂　四郎(Ｓ33年卒)	
6	書　籍	「新選組副長助　永倉新八の研究」	栗原　俊男(Ｓ８年卒)	1	深澤　剛(Ｓ８年卒)	
7	画　集	「小松原勝市画集」「金子幸正素描撰」他	小松原勝市、金子　幸正(Ｓ８年卒)	1	深澤　剛(Ｓ８年卒)	
8	歌　集	歌集「風花」	中村　薫(Ｓ30年卒)	1	中村　薫(Ｓ30年卒)	
9	作　品	16年度作成「夕陽会名簿表紙原画」	仲井　靖典(Ｓ61年卒)	1	仲井　靖典(Ｓ61年卒)	

《同窓会の活動》

番号	種　別	書　名　名　称	著作・制作者	数量	寄　贈　者	備　考
1	会　報	同窓会報　夕陽178～183	夕陽会	5	夕陽会情宣部	
2	アルバム	夕陽書道展記録写真	夕陽会	1	夕陽会文化部	
3	文　集	同窓会誌「北海道第二師範学校」	Ｓ18年予科入学の会	1	山尾　正(Ｓ23年卒)	
4	アルバム	夕陽80年記念アルバム	80年実行委員会	1	坂口　一弘(Ｓ41年卒)	
5	研　究	「函館半世紀の変遷」～「定点撮影」の記録から～	高井　信行(Ｓ30年卒)	1	高井　信行(Ｓ30年卒)	
6	研　究	「函館半世紀の変遷」～「定点撮影」の記録から～(続)	高井　信行(Ｓ30年卒)	1	高井　信行(Ｓ30年卒)	
7	帽　子	北海道函館師範学校制帽白一線	乳井　邦衛(Ｓ19年卒)	1	乳井　邦衛(Ｓ19年卒)	
8	文　集	八昭（Ｓ８年卒文集）	深澤　剛(Ｓ８年卒)	1	深澤　剛(Ｓ８年卒)	
9	会　報	同期会報（Ｓ８年卒会報）	深澤　剛(Ｓ８年卒)	1	深澤　剛(Ｓ８年卒)	

《その他》

番号	種　別	書　名　名　称	著作・制作者	数量	寄　贈　者	備　考
1	書　籍	現代教育講座(全10巻)・教育学全集(全15巻)		1	中川　寿夫(Ｓ29年卒)	

平成14年11月以降の記念館への収納品（資料・出版物・作品等）を、展示目録補遺ＸＶにまとめ、ご報告させていただきました。たくさんの寄贈、有り難うございました。

とくにこの１、２年、記念館への来館者が増えてきたことは嬉しいことです。本州（東北地方）からの会員のお名前が目立ちます。また、来館の感想やご意見をいただけるように「感想ノート」も準備いたしました。どうぞご活用ください。

「夕陽音楽会」のご案内

夕陽音楽会実行委員(夕陽会文化部)
伴　明
（昭和48年卒）

昭和五十二年に第一回目の夕陽音楽会を開催してから、今回で第八回を迎えることになりました。これまで、三十有余年続けてこられましたのも、ひとえに、会員の皆様や関係各位のご協力によるものと、心から感謝申し上げます。

さて、新年一月に開催いたします夕陽音楽会では、会員が指導しております小学生の演奏や中学生の演奏、会員による演奏を予定しております。

演奏内容としましては、恒例の夕陽会会員による夕陽賛歌、師範学校校歌はもとより、全国レベルのリコーダー合奏や吹奏楽、円熟した独唱、若い会員によるヴォーカルアンサンブル、美しい響きの合唱、すばらしい音色のピアノ独奏等、お楽しみいただけるプログラムを用意いたしました。

当日は芸術ホールいっぱいのお客様の前で音楽会を行いたいと出演者一同張り切っております。

会員お誘い合わせの上、たくさんのご来場をいただきたいと願っております。

○期　日
平成十六年一月十六日（日）

○会　場
函館市芸術ホール（ハーモニー五稜郭）

○開　場　十三時三十分
開　演　十四時〇〇分

奇跡を遥かに通り越して

高橋　宏彰
（昭和59年卒　金木町立金木小学校）

まざまざと現実を見せつけられても、どうしても信じられない事があるものだ。当事者としてその真っ直中にいると、子ども達の持つ無限の可能性の大きさと、それを引き出すことのできる分岐点に立ち会う機会に恵まれている教師という仕事の重さを痛感させられる。

時は二十一年前に遡る。

無事に母校を卒業し、地元である青森県北津軽地方に新設された北津軽郡板柳北小学校に赴任した私は三年二組の担任として教員生活をスタートさせた。ものすごく大きな子が一つ下の二年生に存在することに気づくのにそんなに時間は掛からなかった。私の指導する野球部の子の弟だったので、気軽に声をかけたりもした。何かいろいろ口走っているにはいるけれど、こちらが期待したような返事が返ってくることは少なかった。

その二年後、私はその子の居る四年三組の担任になった。身体は人一倍大きいのに、学級で一番小さい子にいじめられていて、ちょくちょく告げ口に来たり、また泣いていたことも少なくはなかった。教室の中でさえそうなのであるから、教師の目の届かない下校時とかは、その小さな子に執拗にやられていたであろう。体力で優っているのであるから一度ぐらいガツンとやってやればいいのにと、もどかしさを感じつつ、このままじゃまいね（いけない）なと三年目の私はそんな四月を過ごしていた。

学級担任として観察するとその子は、言葉遣いがたどたどしいので損をしているけれど、意外にも語彙は豊富で結構難しい言葉も理解していた。身体は大きいけれど身体能力には恵まれず、動きそのものがギクシャクしていた。食欲が旺盛で素早く掻き込むために、大きなゲップは日常茶飯事だったし、時には放屁さえする始末であった。漫画本が大好きで、『北斗の拳』や『ドラゴンボール』の台詞をよく唱えていた。当時の同級生の目には特殊学級の児童と紙一重のように映っていた、ということは後に聞いた。今日の用語であればLDに近いかなと思う。

さて、その年の春の異動で今でも尊敬している先生が赴任してきて相撲部の担当になり活動を強化していた。ラグビー部出身で、競技を離れると慈愛に満ち溢れまさに紳士のようなよき先輩であったことも意を強くした大きな要因だった。

「相撲部に入部させよう、強くならなくても自分に対して少しでも自信がつけば弱い物いじめを跳ね返せるだろう。」自分の思いつきに若かった私は少し酔った。

将を射んと欲すれば先ず馬を射よ、に倣い野球部の保護者会で彼の父にその事を提案した。しかしすぐに返ってきた答えは意外であった。

「あいだっきゃ、相撲好ぎでねーはんで、絶対やねねー。」体が人一倍大きいので、小さい時からいろんな人にいい相撲になるだろうと言われ、相撲という単語すら嫌いになってしまったんだという。その話を聞いてかえって私の闘争心に火が点いた（ただの意地だったかも…）。

そんなある日、学級のみんなの前で、その子に到底受け入れられないような提案をした。

「明日の朝から、わ（私）ど一緒にグランドば走るべし。ついでに給食も少なくして、痩せだら野球部さ入ねが。」案の定、絶対いやだとその子は即拒否をした。

「んだ、いいこと思いついだ。精彦、おめ相撲部さ入ねが。相撲部だば腹一杯飯食わねばまいねはんで、給食最初から大盛りにしてけら。それがら残ってれば何杯お代わりしてもいい事にしてけるど、どんだば？」

――その時歴史が動いた？――

結局その子は、学級担任に籠絡され、給食のお代わりに釣られて、相撲部へ入部することになってしまった。この時が人気力士『高見盛』のはじまりのはじまりだと今では言われている。それでも、無理矢理相撲部に押し込めた私にしても自信がつけばいいなと思っていた程度であるし、彼の周囲もそして彼本人も、活躍することなど、これっぽっちも期待などしていなかった。私が担任していた四年生の間は大方の予想通りで相撲に関しての活躍は大して聞かれなかった。ただ全校児童六百名の前で彼が何かの発表をすることになり、正直なところあまり期待はしていなかったのに、蓋を開けたら物怖じせずに堂々と発表できてびっくりした事が今でも強い印象として私の中に残っている。今にして思えば、節目節目の大きな試合をモノにできた勝負強さと、その事とがシンクロしているような気がしてならない。また、全校にテレビ放送される『スーパーマリオブラザーズ』という創作ビデオ劇を作った時に、私が指名した配役はもちろん『クッパ大王』であり、いい味を醸し出してくれた。

五年生になる前にクラス替えが行われて彼は私の学級ではなくなったが、幸い学年が同じだったので、そんなに距離感は感じなかった。夏の早朝、私と学級の子ども達とカブトムシを捕りに行くという情報を聞きつけると、どこからともなく彼も参加していたそうだ。後にマスコミの対談で、この時の思い出を彼の口から聞いて驚いた。たまに野球の練習が早く終わると、土俵の方に見に行って、胸を貸してあげたこともあった。もちろん、この頃（まで）は私の方が強かった。

六年生になると、大会の個人戦で優勝するというニュースが飛び込んできた。「強くなったの？」と監督に聞くと、いやいやとはっきり否定された。チーム内でも三・四番目の強さらしい。しかも団体戦の節目に負けてチームメイトから顰蹙をかいながら、個人戦ではいい所まで上り詰めてるらしい。事情はどうであれ、相撲をやらせた私としては、素直にうれしかった。少しは自信も付いただろう、しかし、未だに小さい子にへこまされている彼の姿がそこにはあった。（続く）

同期会だより

卒業六十周年記念
北二師十九年会解散大会

畠山　慶一（昭和19年卒）

平成十六年九月で、われわれは卒業六十周年を迎える。齢（よわい）も八十歳を超えてきており、一病をなだめすかし、多病を労（いたわ）り、七人の敵は既に彼方のものとなり、よくぞここまでやってきたと感慨無量のものがある。

私どもは、昭和十九年九月二十日の卒業で、函館師範学校から官立北海道第二師範学校として開設されてから第二回目の卒業生となる。この年度は修業年限が六ヶ月短縮されて半年早く九月の卒業式となった。太平洋戦争が終盤に近付き、卒業生九十七名の中には既に入隊の者もあり、卒業式の翌日には海軍予備学生として土浦・滋賀の海軍航空隊へ出発、後を追うように十月には甲種幹部候補生として仙台・前橋の陸軍予備士官学校へ、また横須賀の海軍砲術学校へ入校するという慌ただしさであった。その他も時を待たず応召され、それぞれの任地に赴きなかには終戦後シベリヤ抑留の身となった二名の学友もいる。

それでも、幸いにして戦死者も出ず生命を全うし、戦後の復興や教育に若い情熱を注ぎ尽くし、定年を迎え更に喜寿・傘寿となり、ふと振り返ってみるとこの間に九十七名の同期生の半数の四十八名が鬼籍の列に入っている。

我々同期の学生時代は、新舎・旧舎といわれる寄宿舎生活の中で、同期生は勿論、上級生や下級生と寝食を共にし、苦楽を分けあい勉学の示唆を共有してきた日月を過ごしてきた。後半は、戦時体制の中で農村や工場に援農や勤労作業に出向き、勉学の機会は少なからず削られてしまった。

この十九年会は、卒業当時のこの異様な状態での決別の故には、その後の結束の絆が深く、昭和三十九年の卒業二十周年を機に、同期会を継続すること本年で二十七回に及ぶ。更に、昭和六十年の四十周年記念には家族を含めた大型の［大アルバム］が作成され、年二回の同期通信［北二師十九年会だより］の発行は五十六号に達した。また周年の節目毎には記念誌［亀田の芋・青春残像・わが道を往く］や随筆集［耳順豊言・残照の譜］等の発行がなされ、本年はその集大成としての記念誌［星霜傘々］の発行がなされた。

我々の同期会では、他界した級友の未亡人にも準会員として参加してもらっていて、更に同伴の夫人も加え男性ばかりであった会合を賑やかにしている。本年は男性の出席者十八名に対して女性の参加者も十八名という結果であった。年々体調不良での欠席が目立つようになり、昨年も大会寸前のキャンセルが数名出て八十歳という年齢ではこれが限度かと思うようになった。本年が卒業六十周年にあたることから一応のけじめをつけることになり、解散大会と名うって六月二十三日に湯の川花びしホテルにおいて大会を開催し、終焉の幕を閉じるに至った。

大会開催の前に、亀田八幡宮において四十八名の物故者の慰霊祭を行い、参加者全員が玉串を捧げ亡き級友の御霊の冥福を祈る。大会では永続してきた会員の絆の深さを確かめあい、それを支えてきた役員に感謝の思いをこめて、学生時代の思い出話等に時の立つのを忘れる。

昭和十九年会はこの日をもって一応は解散という経過となったが、八十歳とはいえ体もまあまあ、口もまだまだ達者の連中もおり、今後のことや夕陽会との連絡もあり世話人という形の若干名の者による運営は残しておいた。今後の慶弔事項や会員の消息連絡事項にいつでも対応できるようにしている。

現在夕陽会の我々の同期には、昭和五十八年から平成六年まで夕陽会会長の任にあった瀬川直光氏や本部役員参与の八木幸夫氏がおり、畠山慶一が同期代表を努めている。函館市内には十七名の同期がおり、前後の先輩後輩の中では比較的多くが在住しており、十九年道南会を結成し春秋の二回の会合を重ねてきたが、これももうそろそろ限界となってきている。

思えば、大正・昭和・平成とよくも戦中戦後をたくましく生き抜いてきた人生であった。夕陽の多くの人々に支えられてきたことも忘れられないことである。

第27回　北二師十九年会卒業60周年記念函館大会　2004年６月23日　於：湯川花びしホテル

十九年会誌「星霜傘々」より

室蘭市　櫻井幸子

私が少女期に学んだ室蘭市本輪西尋常高等小学校は、山懐の美しい自然に囲まれ、校舎沿いに聞く川音、野鳥の囀等の季節の移り変わりを全身に受けとめながら、よき先生がたに育まれ、多くの友を得て幸せな時代を過ごしました。

近頃の私は、小学生であった遠い日を懐かしみ、思い出に埋没してしまう日々が続き、このことが正に老境に深く入っていることの証であることに気付き、複雑な思いが過ぎるのです。

戦前・戦中・戦後の時代の大きなうねりの中で生きて来た私の人生の中で、大きな転機となったのは、あまりにも早かった夫との別離でありました。

早いもので、今年の八月二十七日で三十三回忌を迎えます。

振りかえってみますと、北二師十九年会へのお誘いを受けましたのは、夫が他界して二十三年を経た年で、函館大会での慰霊祭へ参列させて戴いたことが、入会のきっかけとなりました。

慰霊祭までしていただける夫に思いを寄せながら、函館へと旅立ちましたところ、会員のみなさまの温かい心くばりで、前夜祭にまでお招きをいただき、和やかな雰囲気に溶け込んでいける歓びをも感じた中で、瀬川先生から声掛けをいただき、一通の封書を手渡されました。

私は、その場で開封いたし、驚きの中で見たものは罫紙に書かれた夫の授業案でした。

あとから伺ったことですが、初めて参加する私のために、大学の事務局まで出向いてくださって、古い沢山の資料の中から、今は亡き夫の足跡となるものをと探してくださったのが、この授業案とのことでした。

私は瀬川先生の誠意に深く感謝しながら、見えなかった夫の学生時代の一部を垣間見ることが出来、若かりし日の自筆に触れ感激しました。

書道の教案ですと瀬川先生から伺いましたが、簡単にまとめられているこの三枚の罫紙の授業案は、遺された二人の息子と私にとっては掛け替えのないものとなりました。

また、田村新次先生からは、夫の関わりのあった学生時代の写真の幾枚かを見せて戴いたり、寄宿舎の生活振りを聞かせていただいた前夜祭のひと時が、今も鮮烈に心深く残っております。

翌日八幡宮で執り行われた慰霊祭、総会、懇親会いずれも、私にとっては初めての経験で、緊張感の中に充実した貴重な三日間でもありました。

逆縁と申しますか、四十八歳の長男を亡くした主人の父は、地元の北辰中学校現役で函館師範学校五回生として、夕陽会の一人でもあり、瀬川先生や原先生とも交流があり、お世話になったことを、嫁の立場での私も折りに触れて聞いておりましたし、同期会のみなさんの細やかな心くばりの慰霊祭や、前夜祭の模様などを義父に報告にいきましたところ、瀬川先生からの授業案を手にして言葉少なに「仲間とは、ほんとうに有難いものだ…。」と、感激の言葉を洩らした義父には深い思いがあったものと思います。

その義父も九十四歳で生涯を閉じましたが、教育者として筋金入りで道を全うして逝った姿に、今は亡き夫に思いを重ねながら過ぎ去った日々をしみじみと思い入る今日この頃です。

十九年会は人生で言えば還暦。戦後の混沌とした世の中に在って、「北二師十九年会」として結成され、半世紀を越えて六十年もの永い間継続して来られたことは、会員のみなさまの心の結集と、そのご努力に他ならないものと、準会員の一人として入会させて戴いたことに感謝し、心より幸せに思っております。

私は今年の五月一日で満七十六歳。長男は札幌市で、二男は室蘭市で、それぞれ二人の子供の親として生活しており、一人暮しの私は、週二回室蘭市社会福祉協議会の仕事をさせて頂き、生活のリズムを崩さぬように心掛け乍ら、余暇は若い会員からエネルギーを吸収させていただくために「随筆の会」「自分史の会」「俳句の会」など――。足手纏いにならないように気をつけながら、趣味に生活のたのしみを見出しておりますが、確実に忍び寄る高齢化の足音を、こころに、身にしっかりと捉えながら、一日一日を大切に生きていきたいと思っております。

札幌市　笹野榮子

もう二十年にもなりましょうか。悲しくて寂しいそんな時に、突然十九年会の仲間になり、知らなかった皆さんから励まして頂いたりしてとても元気づけられました。

とくに平成十年の旭川大会での十勝岳の眺望の美しさは永く心に残っております。あの空・あの山・あの快い風。望岳台で記念写真のため並んだとき、一台の車から車椅子の老婦人を労って白髪の老紳士が静かに降りてきました。ご夫婦でしょうか。シートを敷き、ポットの湯で茶を点てて奥様に供してから茶碗を手にしたままじっと山の白煙の方を見ておられました。ご主人の仕草や茶筅の捌き、ジャケットの色柄等も目に鮮やかに浮かんできます。私のところからは無言にしかみえませんでしたが、その語らいの深さが感じられて思わず「羨ましい」と声になりました。

この感動と大自然の美しさに大満足し、十九年会の皆様のご好意に感謝しながら、ここらで一応お別れしようかと心に決め、時期を待って十七回忌を終え、札幌に移住したこの時点で心の整理も出来て区切りもよかろうかと考えたのです。

そんな私に、今年で十九年会が解散になり、函館での大会と慰霊祭が行われるので出席されてはとのお誘いがあり、そのお心づかいに心から感謝申し上げます。

とくに、慰霊祭があるということなので、一日として忘れることのない笹野武の青春の地に足を運び、亡き方々のみ霊にも謹んで手を合わせたいと思っております。

私は、多くの方々からいただいたご恩に感謝しながら、元気で生活しております。

皆様のご健勝をお祈りしております。

支部の歴史をふりかえって

美しい教育の森へ
―元気です夕陽室蘭―

室蘭支部支部長　西村昌三（昭和43年卒）

「木々は手をとりあって美しい森林をつくる」――この言葉は、夕陽会室蘭支部の歴史を掘り起こす冊子に玉稿を寄せられた昭和三一年卒の三村美代子氏が提示しています。三村氏が我が詩作の師と仰ぐ、亡き河邨文一郎先生の言葉だそうです。「夕陽の仲間が道内外、いやこれからは海外でもそれぞれの任地で、手をとりあって美しい教育の森をつくっていくことであろう。」と述べています。

三村氏が言われるように、まさに私達夕陽会は、「美しい教育の森の創造」をめざして切磋琢磨する、深い絆で結ばれた同窓会集団です。お互いに生まれや育ち、その故郷は異なっても、青春のある時期、同じ学び舎で学び、喜びも悲しみも共にしてきた熱い血潮で結ばれています。私達一人一人は、「木々の一本一本」ですが、それが結集され、持てる力を発揮すれば、必ずそこに「美しい教育の森」が姿を現わすことでしょう。

我が夕陽会室蘭支部もお互いに手をとりあって、その時々の教育課題に雄々しく挑戦してきました。会員相互の交わりを深め、肩を叩き合い、背を支え合い、前向きに歩みを進めてきました。

「夕陽会報」からの原稿依頼を機に、当支部では室蘭の歴史を掘り起こし、後世に残していこうとの機運が盛り上がりました。第一七九号に掲載された網走支部長・横田達哉氏の、気迫と誠のみなぎる紹介文が、私達を刺激したのは論を待ちません。「支部の歴史をふりかえって」（平成十七年一月十五日発刊）を繙きながら、その足跡を辿ってみます。

一、草創期

函館師範学校同窓会の会報第十号「各支部一覧」によると、室蘭支部の創立は、大正十五年一月二十一日である。支部長・山本文雄氏、理事は大和田甚助氏、会計理事・三戸直敏氏、理事は荒木三郎氏以下九名、会員数は三十八名、会員相互の向上親睦を図る会合など五項目の事業を掲げている。草創の心意気が伝わる。

昭和十三年五月二十三日発行の「同窓会報十七号」には、「亀田の森を故郷として巣立った同志達六十有余名」とあり、十三年間で会員が倍近く増えていることが分かる。また、会員紹介のコーナーがあり、自戒をこめた方針も目を引く。

「若い者を次々と抱き育て、其の揺籃の意志を受け継いで、我等の教育生活を豊潤にし親和あらしむる支部の使命は大きい。しかして我等は、勿論一支部の内のみ結束して他を排するものではない。むしろ支部以外との親睦提携に対して深甚の努力を払ふものである。一に内なる真情の流路を計り、一に教育進展の礎石として他との融和親睦を図る所に我等の支部は結成せられる。（以下略）」

二、黎明期

明治四十五年に設立された北海道函館師範学校は、その後、昭和十八年には北海道第二師範学校と改称され、昭和二十四年には北海道学芸大学函館分校と改められる。

戦後の混乱に伴い教員免許を持つ教員の不足を解消するために誕生したのが「北海道室蘭教員養成所」だった。昭和二十六年から七年間、六期二八六人の修了者が各地の教育現場に雄飛していった。主に北海道学芸大学函館分校の教官が養成所の先生を務めていたこともあり、室蘭に残った修了生の多くは夕陽会室蘭支部に入った。

昭和三十二年三月一日、本部発行の「夕陽」より、〈室蘭支部だより〉を見てみたい。記述者不明だが、当時の室蘭支部の隆盛ぶりが十分見て取れる。

「工都室蘭の躍進にも増して、今や会員一三〇名（十二名の淑女）を数える夕陽会室蘭支部は、質量ともに充実し、岡本大先輩を筆頭に二十四分の十二の校長、二十二分の十の教頭、それに次席、三席級と目白押しに並び、その一人一人が教育関係はもちろん、組合や社会の第一線に立って頑張っていることは頼もしい限り。（以下略）」

夕陽会室蘭支部は、昭和三十二年四月二十七日、岡本源一支部長、佐々木酉雄幹事長の時に、十三ヶ条からなる規約を制定し、組織の活性化が図られた。大正十五年一月の創立から、実に三十二年の歳月が流れていた。

室蘭支部は昭和三十年代前半から、例会という忘年会を蘭西のキャバレー・エーワンで盛大に開催、昭和三十六年、桜井勇支部長、岡島政悦幹事長の時から幕西町の料亭「常盤」で賑やかに開くようになり、それは昭和五十一年まで続いた。

三、充実期、そして今

昭和六十年十二月二十日発行の「夕陽会報第一二七号」には、「室蘭支部は市内小中ろう高校に勤務する会員二百余名、退職されたOB会員約五〇名と、二五〇名を超える会員で構成されている」（幹事長・佐藤修三氏）とあり、「五月の総会と十二月の例会。市内を五地区に分けて当番幹事を出し、出席率は上昇している。組織の結束強化・活性化の表れであろう。」と述べている。

そして今。少子化に伴う学級減や学校の統廃合により教員採用枠は大きく減り、現職会員数は減少している。しかし、私達は先輩諸氏が営々として築き上げてきた夕陽会室蘭支部の輝かしい歴史と伝統を守り、発展させることが一人一人の責務と自覚し、日々の活動に専心している。

以上が室蘭支部の歴史のあらましです。八十年の歴史の重さを感じると共に、室蘭の教育の充実を担う責務の崇高さに身の引きしまる思いです。先輩諸氏が血と汗と涙で建設してきた当支部の進取の旗を高く揚げて前進する決意です。最後にもう一度、「美しい教育の森」の創出を。

研究室だより

教育研究室同窓会の現状
在学中の思い出と同窓会開催の経過

高谷　幸宏
（昭和40年卒）

・はじめに

この度、ひょんなことから夕陽会報への原稿依頼がまわってきました。

いつもの調子で快く引き受けてはみたものの、いざ執筆するだんになり困り果ててしまいました。しかし、藤川潔情宣部長に「原稿締め切り期日も逼迫しているので内容等は一任しますので何とか…」と懇願された経緯もあり、決心し書き始めました。

・四年間の思い出

当時は、六十年安保改定にかかわる一連の学園闘争も終わりをつげ、比較的のんびりムードの雰囲気の中で学生生活を送りました。研究室には一年から四年生まで十八名ほどの学生が在籍し、一年に数度のコンペ以外は全員顔を合わせることがなかったことを覚えています。寮生も結構多く、函館の家から通う学生とはなかなか意思の疎通が図れないこともありました。

また、教育専攻の学生は個性派が多く、「自治会活動」の中核となり、民青、革マル派等に分かれ、学生総会時には激しい議論でぶつかり合う者、サークル「赤い鳥」に入って活動する者、「こぶし座」に席をおく者、自称「アルバイト専門」として頑張る者など多彩で、〔四年課程五・六年目?〕卒業という学生も結構いたと記憶しています。

当時の教授陣では、教育原理の廣川正治先生の迫力ある講義（特に、マカレンコ、ペスタロッチの集団主義教育論・教育哲学等）には圧倒されました。佐藤英吉先生には教育社会学関係の指導を受け、その優しい語り口での講義は、今でも印象に残っています。先生は、このころからティーム・ティーチングの必要性を強く訴えておられました。

他の教授陣では、重鎮の林重信先生、若い大野雅敏先生（現上越教育大学）、入江宏先生（現宇都宮大学）がおりましたが、私は、講義・ゼミ等で直接指導を受けたことはありませんでした。

・同窓会開催の経過

「行動する夕陽会」をキーワードに、先輩の尽力により会員相互の親睦・交流を密にしている同窓会もあるとの情報も流れてきますが、当研究室に限っていえば、まだそこまでいっておりません。どちらかというと同期の絆は深いのですが、先輩と若手の結びつきが浅いのではないでしょうか。

私が在学していた頃の教育研究室の教官陣は前述した五人ですが、故人、大学を変わった方などがいて、恩師で連絡がとれる方はご高齢の佐藤先生だけです。

また、現研究室の教授、助教授等との面識はありません。そういう意味において同窓の絆は淋しい限りです。

ここで、ささやかな、涙ぐましい当研究室の過去の同窓会の様子等について記述を進めます。

教育研究室では、過去三回の同窓会を開催しております。

第一回は、平成元年一月十三日（金）、函館市の稜雲亭で開催しました。鈴木武嗣氏（現・函館短大教授）の命を受け、私が幹事として働き、十五名の同窓生（昭和三十二～四十二年度卒業中心）が一堂に会し、学生時代の思い出話などに花を咲かせ、旧交を温め合うことができました。この会には若い榊博之先生（昭和五十八年卒、現・駒ヶ岳小学校教頭）の姿もあり、大変嬉しく感じたものでした。残念だったことは、恩師の廣川先生（故人）が急に体調を崩され欠席されたことでした。

第二回は、平成四年八月十六日（金）、長谷川良任氏（現・函館市補導センター）、絹野ヒデ子氏（旧姓・中野）を幹事として、函館市のホテル法華クラブで開催。当研究室同窓会会長に磯部正博氏（昭和三十二年卒）を選出しました。十一名の参加者でしたが、山寺利男氏（昭和三十九年卒）が参加し、会を盛り上げてくれました。

更に第三回は、平成七年八月八日（火）、函館市のホテル・ロイヤル柏木で開催。この時も参加者は少なかったものの、松田修司氏（昭和四十一年卒・現札幌カネマル）が初参加し、民間人の立場から教育界に対し激励をいただき、この時は教育談義に花が咲き、楽しいひとときを過ごすことができました。

・おわりに

紙面の関係で詳細は省きますが、これまで同窓会会長に磯部正博氏、会長代行に鈴木武嗣氏（研究室代表者も兼務）、幹事に高谷、絹野、辻口、長谷川（良）を決めております（但し、幹事団は暫定）。会則もでき、会員名簿も絹野氏のねばり強い調査で、現在までに百八十名程の住所は分かっています。あとは、函館市在住の現職の皆さんが同窓会の意義?を感じ、会を引き継ぐ意思があるかどうかです。何かの会合の折にでも仲間で検討をお願い致します。私たちはいつまでも連絡を待っています。

（追記……以上、記述したことが、今まで開催案内が会員名簿調査・整理等の関係で行き届かなかった同窓の皆さんに紹介できれば幸いと考えますし、皆さんから同窓会継続に関し積極的な意見があればとも考えておりますので、よろしく。）

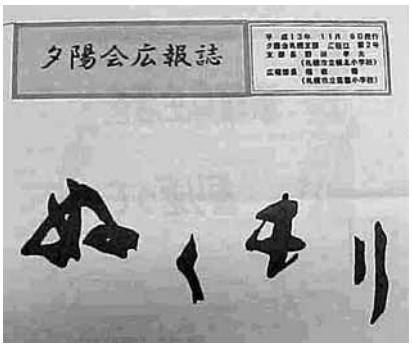
各支部会報の「題名」

これまで、情宣部に届けられました各支部や同期会の会報をご紹介いたします。多くの会報を取り上げるとなると誌面の都合上「題名」を取り上げるのが最適と考えました。
「題名」に込められた思いが偲ばれます。

函館市支部会報「夕　陽」
・年二回発行

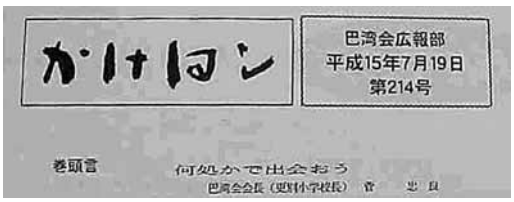
檜山支部会報「夕陽檜山」
・年二回発行

渡島支部会報「夕陽渡島」
・年二回発行

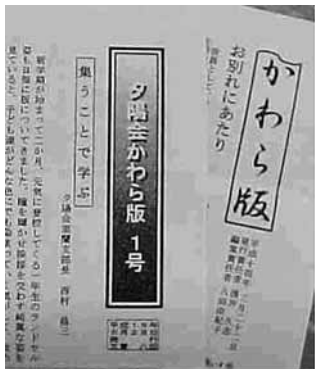


札幌支部会報
「ぬくもり」

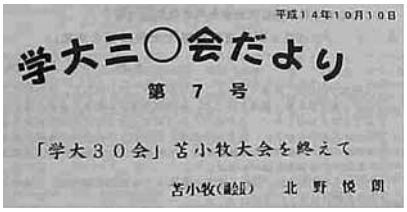
帯広支部会報「函　山」
・年二回発行



十勝支部（巴湾会）会報「かけはし」



室蘭市支部会報
「かわら版」



昭和三十年卒同期会報
「学大三〇会だより」

昭和二十九年卒同期会報
「二期会」

昭和八年卒同期会
八昭会道南支部会報
「巴湾だより」

支部だより

石狩支部便り

石狩支部長　市川軍治
（昭和43年卒　北広島市立大曲中学校長）

この度の石狩支部総会で、支部長という大任を引き受けることになりました。石狩支部会員は、現在、現役会員一五八名、他管内勤務会員六名、教職以外会員二名、退職会員一四名で計一七〇名の会員を擁する支部となっております。現在の石狩支部に至るまで多くの方々のお力をいただいております。特に、退職会員の方々には、並々ならぬご尽力をいただきました。その石狩支部を支部長として引き継ぐことは、私にとって荷が重すぎます。しかし、私は、若い時代から支部の会合に顔を出させていただき、支部の発展のために組織や体制を整えてこられた支部の歴史を見てきました。歴代の支部長様方や退職校長様のお陰で現在の石狩支部の存在があります。この積み上げられてきた石狩支部をより発展・充実させるため微力ながら力を尽くす所存でいます。

さて、今年度は、夕陽会石狩支部の支部長として皆様と一緒に活動することになりましたが、本部、支部の役員の方々、そして退職会員、現役会員の皆様のご指導を賜りながら誠心誠意努力し、責任を果たしてまいりたいと思います。これを機会に、更に、会員相互の『絆』を強める覚悟でいます。皆様のご協力とご支援を得ながら、支部長として会員の皆さんのお力になれるよう、ほかの役員の方々と連携をとりながら活動してまいります。

昨年度も、本部会長様はじめ多くの本部役員の方々、そして、石狩支部長様、支部役員の方々には、毎日の忙しい業務の合間を縫って、夕陽会石狩支部の組織強化のため、夕陽の仲間を思い、色々な角度から、我々、夕陽会員のために、活動していただきました。その成果は、着実に前進しております。陰に陽に、夕陽会の大きな力となって、最大限の努力をしていただきました。心より感謝申し上げます。

今年度の石狩支部総会は、五月八日（土）、札幌の京王プラザホテルにて、三十七名の出席者のもと、開催され、石狩支部の活動方針、内容、会計予算、役員体制が了承・確認されました。お忙しいところ本部副会長の中瀬裕義様にもご臨席賜り、現在の夕陽会の現状や各支部の状況、そして、石狩支部への励ましの言葉をいただきました。総会後には、新入会員歓迎会・懇親会を行い、他管内より転入された方や新採用者（今年は六人）を囲み、近況報告を語り合い、仲間としての親交を深めることができました。

今後も更に『創造し行動する夕陽会』に、充実・発展させるため皆さんとともに石狩支部を盛り上げていきます。

東京支部便り
～夕陽会への思い・人との出会い～

東京支部長　奈良吉彦
（昭和44年卒　東京都東村山市立北山小学校長）

平成十三年度に、東京支部長をお引き受けしてから四年目を迎えました。上京して三十六年の年月が流れ、臥牛山、立待岬、五稜郭、松風町、谷地頭等々懐かしい故郷を日々思い出しています。

私と東京支部との出会いは、今から十八年前に遡ります。教師生活も十八年ほどが過ぎ、諸先輩の勧めで管理職を志向するようになった私は、教頭一次選考が通り面接を迎えることになりました。一次選考の合格があった数日後、かかってきた一本の電話が、夕陽会とのかかわりをつくる大きなきっかけになったのです。「もしもし、夕陽会の佐藤ですが、一次合格おめでとう。ついては、面接練習をするので来るように」との内容でした。当支部五代目支部長の佐藤弘先生に面接練習をしていただいたお陰で面接にも合格し、教頭としての職務を経験することができたのです。その後、校長選考でも先輩の方々に多くのご指導をいただき感謝しております。

顧みますと、我が支部は、大正七年、一、二名の青雲の志の上京に始まり、激動の昭和、戦前戦後のかけ橋として、大先輩の方々の労苦と東京都に残した数々の功績が大きな支えになっています。まだ本部夕陽会も正式にない頃、東京夕陽会懇親会がもたれ、寮歌が高らかに歌われたのでした。特に、函館師範第三回生で大先輩であります安藤哲次郎先生は、東京夕陽会支部長を三十数年も就任され上京する同窓を愛し情熱をもってお世話をし、その原点が今日の東京支部に受け継がれています。ここに、改めて感謝の意を表すところです。

爾来時が過ぎ、多くの諸先輩の方々のご尽力により、今に至っています。現在東京支部は、名簿上で一〇〇名を越える会員があり、その内、現役が四十名ほどを数えています。また、管理職では、校長が十五名、教頭が九名という状況ですが、本支部にも、会員が広範囲にちらばっているため、横の連絡を取るのが困難であること。現役と退職者とに年齢的な差があり、そのかかわり方の工夫が必要であること。教員の場合、新規採用教員の就職が少なく、道内外における就職状況を把握したい等の課題があります。その解決に向け、本部夕陽会の「創造し行動する夕陽会」を指針とし、励んで参りたいと思っております。

次回の本支部の会合では、私の中学生時代の恩師である寺中哲二先生が作曲された、「夕陽賛歌」を高らかに歌いたいと思っています。この歌への思いを常に持ちながら、本支部の充実のために努めていく所存であります。

前納会費納入会員名簿追加分

伊早坂　政宏　石狩　昭41
中村　泰嗣　函館　昭42
（平成十六年十一月三十日現在）

夕陽会員訃報

遊佐　淑子氏　昭26　16・7・14
七飯町字大沼町396の3　勉氏
川村　清一氏　昭5　16・7・16
浦河郡浦河町常磐42　裕子氏
青田　正志氏　昭28　16・7・20
札幌市豊平区平岸6の12の4の19　博子氏
駒野常八郎氏　昭9　16・7・23
札幌市北区新琴似12条6の54の6　アイ子氏
池野　栄氏　昭11　16・7・24
札幌市中央区南4条西14の1の31の504　清江氏
長尾　紀之氏　昭37　16・8・2
札幌市清田区平岡4条6の13の10　広子氏
佐藤　哲也氏　昭24　16・8・4
函館市人見町5の29　栄子氏
岡田　功氏　昭19　16・8・5
帯広市西19条南5　安子氏
斉藤　亨氏　昭32　16・8・5
登別市中央町6の17の1　千里氏
木村　三郎氏　昭11　15・5・25
苫小牧市澄川町3の15の12　美代子氏
三浦　静男氏　昭22　16・7・30
函館市宮前町33の15　磯雅晴氏
佐藤　良蔵氏　昭18　16・3・7
七飯町大中山349の15　ヒデ氏
小山　政行氏　昭8　16・8・7
函館市美原2の13の5　ヒサエ氏
吉田　善男氏　昭16　15・6・16
岩見沢市8条西7　二三子氏
田仲　忠男氏　昭12　16・8・8
函館市富岡町3の18の17　栄子氏
浅利　義昭氏　昭35　16・8・12
函館市高丘町31の4　清江氏
山本　利視氏　昭10　16・8・13
北見市高栄東町2の12の27　コト氏

斉藤　孝造氏　昭6　16・8・17
上磯町七重浜2の45の4　正宏氏
渡辺　武氏　昭14　16・8・22
札幌市西区山の手1条13の5の43　真砂子氏
高島　友次氏　昭29　16・2・17
函館市大川町10の19　洋子氏
朝田　実氏　昭17　16・9・15
札幌市中央区北9条西23の2の11の201　明子氏
花田　俊勝氏　昭26　16・9・16
函館市桔梗4の10の7　妙子氏
渡辺　国守氏　昭31　16・9・22
函館市深堀町31の23　美穂子氏
大和田孝一氏　昭14　16・9・29
札幌市中央区宮の森3の4の6の1の501　寺口初枝氏
松下万寿雄氏　昭26　16・10・1
根室市宝林町4の210　幸子氏
渡辺　重一氏　昭28　16・9・29
七飯町字本町11　英子氏
冨原　勝郎氏　昭23　16・10・2
函館市本通1の3の18　和子氏
小本　堅二氏　昭52　16・10・4
札幌市西区西野3条9の10の1　郁子氏
松井　邦伸氏　昭48　16・10・3
室蘭市水元町50の16　真知子氏
山口　弥一氏　昭16　16・10・14
函館市美原1の29の10　澄子氏
八木徳之助氏　昭13　16・10・15
札幌市中央区南15条西19の4の22　千歳氏
能勢　将文氏　昭13　16・10・21
札幌市西区八軒7条東3の1の7　逸子氏
三浦　光春氏　昭2　16・10・16
横浜市港南区港6の15の7　三浦高嗣氏
高野　忠夫氏　昭3　16・10・21
釧路市緑ヶ岡4の6の3　昭博氏

早坂　孝史氏　昭14　16・11・10
釧路市住吉1の3の23　元亨氏
菊田　俊治氏　昭35　16・10・12
苫小牧市ときわ町5の3の18　悦子氏
山岸　惇氏　昭34　16・10・6
札幌市手稲区手稲本町一条1の15の901　幸子氏
丹波（中島）良子氏　昭30　16・9・15
東京都武蔵野市中町3の3の8の103　正信氏
田中　昶氏　昭31　16・10・3
函館市松川町38の4　貢志氏
（平成十六年十一月二十五日現在）

吉祥氏短歌

東京支部長、奈良吉彦氏に、支部便りを依頼しましたところ、原稿に同封されて来ました望郷の思いを謳った短歌です。故郷を思う気持ち、同窓諸氏にもご紹介いたします。（情宣部）

夕陽会支部長会
平成十三年六月十六日（土）
於　京王プラザホテル札幌

故郷を思う吾今懐かしく
　函館弁に心和まん
青雲の志をば抱きつつ
　連絡船のドラに送られ
上京し内地で暮らし三十年
　夕陽思うとき多くなり
臥牛山立待岬大森の
　浜に佇む啄木の碑よ
お互いに思いを込めて集う今日
　夕陽会がさらに充実
故郷を語る笑顔がすばらしい
　松風町に五稜郭など
谷地頭宝来町に十字街
　大門あたりそして湯川
元町のかいわい今も懐かしく
　漫ろ歩いて弥生弁天
穴澗にて海にもぐって火を囲み
　暖を取りつつ行く夏惜しむ

編集後記

◆表紙写真は、晩秋の光を浴びて聖ミカエル像が立つトラピスチヌ修道院遠景です。撮影の日は、十一月二十六日、やっと晴れ間がのぞいたのを見計らって出かけましたが、何と間の悪いことに、閉館日ということで中には入れません。今秋はあいにくの曇天が続き、撮影日和に恵まれません。次の機会はいつになるかわかりませんので、仕方なく、正面の鉄柵の間からカメラを押し込んで撮影したものです。居合わせた数人の観光客と、眼が合ったとき、共に残念光線が飛び交いました。

◆東京支部長奈良吉彦氏から届けられた短歌は、札幌で夕陽会総会が開かれた平成十三年に来道した際のもの。町名・地名がちりばめられて、地名が呼び起こす記憶、土地にまつわる思い出が想像されます。故郷を思う気持ちは、年を重ねる毎に鮮やかに強くなってくるように感じますが如何でしょうか。

◆次号依頼：次回、「支部だより」は、埼玉支部と室蘭市支部の予定です。準備をお願いいたします。

◆お願い：各支部会報や同期会報のバックナンバーがありましたら情宣部までお届けくださるようお願いします。

（情宣部長　藤川　潔　記　昭45年卒）

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。

041-0806 函館市美原3丁目48番6号
北海道教育大学教育学部附属函館小学校内　北海道教育大学夕陽会本部
電話番号（0138）46—2235
夕陽会専用（0138）34—5520
FAX番号（0138）47—7376

題字　文化勲章受章者　金子賢蔵（鷗亭）氏（昭4卒）